

行列が上賀茂神社・下鴨神社の両社に到着すると、それぞれ社頭の儀が行われ、勅使が御祭文を奏上し、御幣物を奉納する。さらに平安朝をしのばせる雅な雰囲気の中で、神馬あずまあそびの引き回し、舞人による「東游（東遊）」の舞が奉納される。



(c) 祭礼をとりまく空間

両社はともに広大な森に包まれ、祭ごとにより神体山から祭神を迎える神迎えが行われるなど、社殿創立以前の古代信仰・自然信仰が現在まで色濃く残っている。

上賀茂神社は、今日でも厄除、方除、必勝ほうよけの神として信仰を集めている。本殿・権殿は共に流造の典型として国宝に指定され、他の34棟は重要文化財である。

既に奈良時代初期の山城国風土記に見えており、社殿の創建は天武7年（678）と伝える。現在の社殿は、本殿・権殿が文久3年（1863）、その他の社殿は寛永5年（1628）造替されたものである。

下鴨神社も、平安期以前の創祀である。京都最古の社の一つで山城国一の宮と崇められ、国事を祈願し、国民の平安を祈る神社として「賀茂斎院の制」「式年遷宮の制」等が定められた。欽明天皇5年（544）から賀

平安遷都以来、時期によってその都市域を伸縮させてきた京都であるが、おおよその都心域に住まう人々の氏神は、今宮、北野、上御霊、祇園、伏見稻荷、松尾、藤森といった郊外に鎮座する神々であった。社は郊外に鎮座するものの、祭りの際には、神は輿に乗り氏子の間を巡り、氏子の居住地内のお旅所に滞在する。神輿が遷する御旅所での祭事が祭礼の中核となるのは全国共通のことであるが、京都においては神輿を迎え、あるいは送る際の神賑の風流が早くから発達した。それは都市ゆえ、不特定多数の人々の目線に応えようとした結果であり、豊かな祭礼文化を生むに至るのである。



图2-15 氏子域

茂祭が行われていたという伝承がある。国史跡「賀茂御祖神社境内」の広大な境内には、本殿（国宝）2棟や53棟の重要文化財社殿が並び、建立は、本殿が文久3年（1863）

(江戸後期)，その他の社殿寛永5年（1628）（江戸前期）である。

上賀茂神社、下鴨神社は、ともに平成6年（1994年）、「古都京都の文化財」として、「世界遺産条約」に基づく世界文化遺産に登録された。

上賀茂地区の町並みは、上賀茂神社を中心に、社家と氏子によって門前集落が形成され、室町時代から神官の屋敷町として発展してきた。今日でも神社から流れ出る明神川みょうじんがわに沿って、社家の屋敷が連なり、明神川に架かる土橋、川沿いの土塀、門、土塀越の緑と一体となって、江戸時代にできた社家町の歴史的景観を伝えている。